長谷川恒男
虚空の登攀者

佐瀬 稔 著

谷川恒男 虚空の登攀者

稔著

山と渓谷社

著者略歴

1932年、神奈川県生まれ。55年、東京外国語大学英米語学科を中退。報知新聞社に入社。運動部長、文化部長などをへて73年、退社。フリーとなり、ルポルタージュ、ノンフィクションの執筆活動に入る。『リングサイドでうたを聞いた』（ベースボールマガジン社）、『反逆の経営者』（プレジデント社）、『日本人ここにあり』（講談社）、『自衛隊の三十年戦争』（講談社）、『金属バット殺人事件』（草思社／日本推理作家協会賞＝評論その他部門＝受賞）、『うちの子がなぜ』（草思社）、『いじめられて、さようなら』（草思社）、『狼は帰らず　森田勝の生と死』（山と溪谷社）、『喪われた岩壁　第2次RCCの青春群像』（山と溪谷社）、『ヒマラヤを駈け抜けた男　山田昇の青春譜』（東京新聞出版局／ミズノ・スポーツライター賞受賞）、『彼らの誇りと勇気について　感情的ボクシング論』（世界文化社）など著書多数。

長谷川恒男　虚空の登攀者

一九九四年七月二十五日　初版第一刷

著者　佐瀬　稔

発行者　川崎吉光

発行所　株式会社　山と溪谷社

住所　東京都港区大門一―一―三三

郵便番号　一〇五

電話　〇三―三四三六―四〇二六（編集部）

〇三―三四三六―四〇五五（営業部）

振替　〇〇一八〇―六―六〇二四九

印刷・製本　図書印刷株式会社

＊落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

＊定価はカバーに表示してあります。

© Minoru SASE 1994

ISBN-4-635-34007-4

長谷川恒男
虚空の登攀者

佐瀬　稔　著

山と溪谷社

[目次]

プロローグ……5

[第一章]
八百万人の風景……13

[第二章]
死んだっていい……45

[第三章]
やさしい嵐……79

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

[第四章]
風のなかの声……111
[第五章]
さらば、友よ……149
[第六章]
アルプスの暗い壁……182
[第七章]
ウルタル・命の谷……227
エピローグ……271
あとがき……280

ブック・デザイン　井上敏雄

写真提供　アルパインガイド長谷川事務所

カバー写真＝1978年、アイガー北壁を登攀する長谷川恒男

写真協力　中野融、浜川悠、平田謙一、山田圭一、米山芳樹

プロローグ

自分たちは別の世界にでかけて、またもどってきたのだ。
生活のよろこびと、人間へのよろこびをもって帰ってきた。

――アイガー北壁初登攀者ハインリヒ・ハラー『白いクモ』（横川文雄訳）から

人はいつでもどこでも、死ぬことができる。

モン・ブランの麓、シャモニのガイド学校教師でフランスが生んだ希有の名アルピニスト、ルイ・ラシュナルは一九五〇年、モーリス・エルゾーグらとともにアンナプルナ（八〇九一メートル）に登り、人類初の八千メートル峰登頂者となったとき、遭難死寸前の状態を突破して英雄的生還を果たしたが、五年後、シャモニ・ガイド学校の校庭ともいうべきヴァレ・ブランシュを、観光電車の駅、モンタンベールに向かってスキーで滑降中、クレバスに落ち、首の骨を折って死んだ。三十五歳。

一九三二年、ニューヨークからヒマラヤにやってきたアメリカ人、ランド・ヘロンは、ドイツの偉大な登山家、ヴィリー・メルクル率いるナンガ・パルバット登山隊に参加、東稜上六九五〇メートルで断念した隊とともに無事下山した。その年に始まったドイツ人たちの執拗なナンガ・パルバット攻撃は、二十一年後、メルクルの義弟、カール・M・ヘルリヒコッファーが組織したオーストリア・ドイツ隊が初登攀に成功するまで続き、メルクル自身はじめ多くの死者を出したが、ヘロンは山では死ななかった。イギリスのノンフィクション作家で自分自身、登山の体験を持つエリック・ニュービイによれば、彼はのち、エジプト・カイロ郊外のギザのピラミッドを登っているとき、小石で足を滑らせ、転落死している。（『世界登攀史』近藤信行訳による）

もちろん、生き永らえることもできる。一八六五年、スイス・アルプスの処女峰、マッター

ホルンを初登頂したイギリス人登山家、エドワード・ウインパーは、七十一歳まで生きた。七人が頂上を踏み、下山の途中、先頭から四人目までが次々に滑落して死亡。ザイルが四人目と三人目の間で切断し、ウインパーら三人が転落に巻き込まれずにすんだ事故について「生存者のうちの一人がザイルを切ったのではないか」と疑惑の声が起き、告発沙汰となったのちウインパーはアルプスから遠ざかり、そしてピラミッドにも近づかず、一九一一年、病に倒れるまで生き延びた。名声を得、アルプス登攀史を飾る人物にもなった。

死も生もそうやって、ある日、何気ない顔で人々の家のドアを叩く。

パキスタンの首都イスラマバードに隣接するラワルピンディから、インダスの谷沿いに北方地域（ノーザン・テリトリー）のギルギットにいたり、フンザをへてフンジェラーブ峠（四六〇〇メートル）を越え、中国のカシュガルに達する千二百六十キロの道は、カラコルム・ハイウェイと命名されている。

一九六七年、中国が全面的に協力してシルク・ロードをたどる難工事が始まり、両国合わせて四百人以上の犠牲者を出した末、七八年に完成。八六年にはパキスタン・中国以外の外国人にも開放された。これによって、カラコルム山中の秘境へのアプローチは飛躍的に容易となった。ギルギットからフンザまでの約百キロは、かつて、谷を削って通る心細い道で三日の難行苦行を重ねなければならなかったが、今では四輪駆動車によってほぼ三時間で達することがで

きる。ラワルピンディーギルギット間六百九キロは、バスでざっと二十時間。

ただし、インダス川の急峻で深い谷、あるいは砂漠地帯のもろい岩盤に道が刻まれているため、完工の直後から落石、地滑り、崩壊による寸断がひっきりなしに続き、ラワルピンディーフンジェラーブ峠間は永遠に未完成道路の観がある。バスの乗客が落石の直撃を受けて死ぬ、バスそのものが数百メートル下、インダス川の激流に叩き落とされる、などの事故はあとをたたない。眼前で道路が通行不能となり、常時待機している修復工事隊の到着を待ち、工事が終わるまで十数時間を過ごす、といった旅はごく当たり前のこととなっている。

カラコルム・ハイウェイが開通する前から、ラワルピンディーギルギット、あるいはスカルドゥを結ぶフォッカー機による空路があるが、有視界飛行のため、理想の天候条件が得られないと一日一、二回の便は日常的に欠航する。一か月間、ただの一便も飛ばぬままで終わることもある。高度約五千メートル、ナンガ・パルバット八一二六メートルの山腹をかすめ、ラカポシ七七八八メートルを眺める豪華きわまりないフライトは、運がいいか忍耐強いか、時間の制約のない者か、そういう乗客だけが経験できる。

ギルギットは、はるかの昔から中国のタリム盆地とインドを結ぶ交通の要衝。何百年もの間、タフな商人や求道の仏僧が岩山と氷河、足がすくみ目のくらむ深い谷、登り下りを繰り返す難路、厳しい気候を踏み越えて通り過ぎて行った。「苛烈な旅路のオアシス」のおもかげはいまだに残り、バザールは活況を呈している。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

このギルギットから四輪駆動車でさらにカラコルム・ハイウェイを進む。道はいよいよ難路となる。谷の対岸に、かつてのシルク・ロードがかすかに続き、おそるべき高捲き（難所を避けて高く登る）、トラヴァース（横断）を繰り返した末、地盤の崩落にあってフッととぎれていたりする。徒労と無為の道。

アリアバードを過ぎてフンザ川の右岸（上流から向かって右の岸）を未舗装のジグザグ道で急登し、やがて、標高二千五百メートル、南向き斜面に開けたカリマバードの村落に着く。七四年まで、ミール（藩王）が支配していたパキスタン領内の自治王国フンザ。古くから「シャングリラ」「不老不死の桃源郷」などと呼ばれたその王国の核心地である。村落を見下ろす丘の上には、現在もミールの館が建っている。

晩春、高台にはまだアンズの花が残り、その下にはリンゴやナシの花、そして天をつくポプラの新緑。花壇のように手入れの行き届いた段々畑。

旅籠（ホテル）のテラスに椅子を出して、雲の去来の中、見え隠れするカラコルムの山々を茫然と眺めていると、谷間のオアシスからひっきりなしに幼い子供たちの叫び声が聞こえてくる。バザールの喧騒などとはまったく無縁の隔絶の地ではあるが、まぎれもなく、ここは人々が気の遠くなるほどの歳月、住み親しんだ土地である。

子供たちの悲しいくらい澄んだ声に、静寂の気配がかえって深まる。晴れた空がにわかに曇り、ほんの十数分、強い雨が降ったあと、谷に盛大な虹がかかった。

村落の背後に向かって右側、岩山に鋭利な刃物で叩き割ったような荒々しい裂け目が見える。ウルタル谷はそこから始まる。落石に脅えながら谷を攀じ登って標高三千三百メートルに達すると、谷が開けて羊の放牧地となり、石で囲んだ羊飼いのための小屋が建っている。右はウルタル氷河、三方はのしかかってくるような大岩壁。上部は雲で覆われており、ときおり、鋭利で複雑な岩峰群、純白の雪田が半ば姿を見せる。振り返るとラカポシの白い峰。

しばしば、遠く近くで轟然たる音が発生する。氷河の崩壊、雪崩、落石、岩なだれの絶えることがない。轟音は井戸の底のような台地を揺るがす。はるかの高みに起きた雪崩は岩壁を走り、氷河で爆発し、数十秒後には三千三百メートルをすさまじい爆風となって襲い、テントの外に置きざりにされた物をことごとく吹き飛ばしていく。

春四月、羊飼いの小屋を雨が濡らした夜が明けると、手の届きそうな高さまで、新雪がきていた。

この三千三百メートルにたどりつく途中、豊かで清冽な流れに何度となく出会う。高所の氷河から水を導き、南向きの斜面をオアシスにする水道である。人の手によって岩が丹念に刻まれ、あるいは細密に石が組まれ、明らかに、歳月かけて建設されたものとわかる。

この水道によって、放牧地での汚染をまぬがれた水が村落を潤す。清らかな水だからフンザに住む人々は風土病を病むことがなく、素朴な食生活とあわせ長寿の因のひとつになっている。カリマバードに住む長老は、客に濃厚で冷え冷えとしたアンズのジュースを振る舞い「フンザ

の民にとってウルタル谷こそは生命の泉なのだ」という。

その谷に別の名がある。ギルギットのバザールで売っている百二十万分の一地図「カラコルム　マウンテニアリング・アンド・トレッキング・マップ」。等高線のない、山稜と谷と氷河、それに心細いルートを線で示しただけの素朴な地図だが「ウルタル・ヴァレー」の表記の下にカッコつきでもうひとつ「デス・ヴァレー」（死の谷）と書き込まれている。

長年、フンザに生命をもたらしてきた谷になぜそんな別名があるのか、本屋の店番をしている若い男は説明できない。

ナジール・サビールはギルギットから四輪駆動車で二日がかり。パキスタンの首都イスラマバード、町外れの静かな住宅地に住んでいる。新しい家に隣接して事務所。

一九五三年、フンザの北限に近い小さな村落ラミンジーに生まれ、九歳のとき、カリマバードの下、フンザ川沿いの村アリアバードに移って小学校に入り、中学、高校をギルギットで卒業、一九七〇年以来、ラワルピンディに移る。八六年、イスラマバードで、カラコルムの山々への各国遠征隊やトレッキング旅行のためのオフィス「ナジール・サビール・エクスペディションズ」社を起こした。濃い眉、たくましく張った顎、真一文字に引き結んだ唇、氷雪と烈風に磨きあげられた肌。パキスタン人としてただ一人、八千メートル峰の頂きを四度にわたって踏んだこの国最高のアルピニストである。ラインホルト・メスナー、ダグ・スコットなど世界

一流の登山家と行をともにしたこともある。フンザが生んだ英雄。
ナジール・サビールは谷の別名の由来を知っていた。
「百年から百五十年前、ウルタルの谷では長年にわたる水道工事中に、落石や雪崩に打たれて何十人もの村人が死んだ。以来、あの谷にそのような名がついたと長老に聞いたことがある。おそろしい谷は、死者によって生命の谷となったのだ」
その谷に、四十歳過ぎの日本人クライマーが踏み込んでいった。

〔第一章〕

八百万人の風景

長い間続いた戦争が一九四五（昭和二十）年に終わり、からくも生き残った男たちが帰ってきた。二年足らずあとの四七（昭和二十二）年、日本中で合計二百六十七万八千七百九十二人の赤ん坊が生まれる。五年前、昭和十七年の出生数約二百二十三万人に比べ爆発的な増え方。

頭上からもう焼夷弾が降ってこない。艦砲射撃、敵軍上陸、本土決戦の恐怖は去った。食い物は絶望的に乏しく、明日の見通しもたたない混乱のさなか、生命回復・歓喜の歌が、そういう数字になったのである。

翌二十三年は約二百六十八万人、二十四年は約二百七十万人。二十五年になってにわかに減り、約二百三十四万人。かくて、昭和二十二～二十四年生まれはベビー・ブーム世代と呼ばれることとなった。三年間を合計して約八百五万人。

やがて成長すれば、そしてこの国がなんとか存続するならば、彼らは多数派としてひとつの時代を表現し、主流を形成することになるだろう。商品を作り、売りつける側は彼らの存在、趣味、生活感覚、ライフスタイルを無視しては商売にならないにちがいない。

巨大な塊の上部に首尾よく自分の席を確保することができたら、彼らは多数であるがゆえの特権を享受できる。ただし、そうなるまでに、多数派自身の内部でまず苛烈なひしめき合いが発生する。押しくらまんじゅうからはみだした者は、ゲームからおりて沈黙の底に沈み込むか、おのれ自身の手で独自の存在証明を築きあげねばならない。一人残らず手をつなぎ、いっしょに歌を歌うわけにはいかないのだ。このコーラス・グループには、定員というものがある。八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com